



前田寛治「裸婦」

(会員)

秋山功
伊東總吉
伊藤英一
薄井良昭
太田貞雄
佐藤裕幸
杉野和夫
鈴木忠男
鈴木正道
中井嘉文
野口勉
野原宏
福井豊
堀良慶

(ゲスト)

木村廣見
和田孝明
和田幸子

(敬称略・50音順)

NPO法人あーと・わの会 通称：「わの会」

第42回放談会

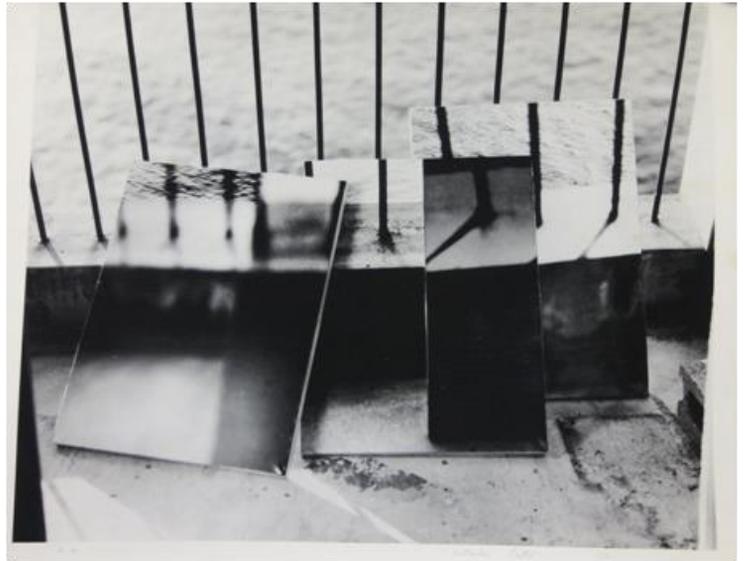


2015年7月20日(月)・祝日 13時～16時
於 東京・京橋区民会館 洋室5号室

第42回放談会

1. 日時 2015年7月20日(月)・祝日 13時～16時
2. 場所 東京・京橋区民会館 洋室5号室
3. 出席者(計17名、敬称略、50音順)
＜会 員＞秋山功、伊東總吉、伊藤英一、薄井良昭、太田貞雄、佐藤裕幸、杉野和夫
鈴木忠男、鈴木正道、中井嘉文、野口勉、野原宏、福井豊、堀良慶
＜ゲスト＞木村廣見(さいたま市)、和田孝明、和田幸子(川越市)
4. 司会進行:佐藤裕幸、書記:鈴木忠男、写真・編集制作:野口勉
5. 放談会(発表順)

① 伊東總吉



齊藤智 (1936-2014年) 「Untitled C 1976年」スクリーンプリント
56.5×70cm 制作:1976年

1963 東京芸術大学油絵科卒業、1972 第7回ジャパンアートフェス優秀賞
1974 フルブライト留学(1～8月)、1975 第10回ジャパンアートフェス大賞
1976 第10回東京国際版画ビエンナーレ大賞
1979 神戸市文化奨励賞、1980 第5回ノルウェイ国際版画ビエンナーレ大賞
1983 第4回国際版画展(W. P.C) Edition買上賞

作家の自宅のベランダを撮影したものを原寸大にひきのばしてパネル張りし再び撮影現場に戻した“実と虚”シリーズの一枚。東京都現代美術館所蔵

② 鈴木正道



篠田桃紅（1913年生）「幽微」 朱・墨 制作：1988年

75歳の作品、黒い和紙に一气呵成に描いた。「抽象画といえば然り、書といえば書」

家内が桃紅のファンであること。私の知るところでは好みはいろいろ。余り「わの会」向きとは思わない。彼女曰く西洋抽象画の影響は強い。だが理論に共鳴した覚えはない。ただ抽象的なリトグラフ等でも「書の基礎」がある。書は良寛、会津八一の影響が強いようである。「書」を土台にして抽象画へ移行した点はユニークなり。近年、ベストセラーの本で知られるようになった。「百歳の力」（集英社新書）、「百三歳になってわかったこと（人生は一人でも面白い）」（幻冬舎）

映画監督の篠田正浩は従弟にあたる。

<談>福井：今年5月、NHKEテレで篠田の特集番組が放映された。

③ 太田貞雄



山下新太郎（1881～1966年）「京都清水寺」 油彩・板 F3号 制作：1936年

1904 東京美術学校西洋画学科卒業、1905 渡欧 在仏（～10年）、1909 ルノワールのアトリエを訪ね作品を購入、1910 帰国 1911 文展三等賞受賞

1914 二科会創立に参加（～30年）、1931 再渡仏、1932 フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章授与、1935 帝国美術院会員

1936 有島生馬、石井柏亭らと一水会の設立に参加、1955 文化功労者

<談>太田：もう1点（青樹舎額）持って来たかったが見つからなかった。

④ 伊藤英一



林益参 「祈り」 油彩・キャンバス 60×90cm 制作:2015年

日頃から「このような画題を描けたらおもしろいな」とか「このような構図がいいな」とか自分なりに考えたりしています。そこで中国の知り合いである林氏にお願いし、写真をもとに約2か月かけて描いてもらいました。私の現代絵画は「日常生活のさりげない光景の中にストーリー性を描いた作品」です。本作品は9.11で息子を失った父親の祈りの風景です。行きかう人々の人生・姿を遠景にぼかし父親の姿にスポットをあててもらいました。さしこむ光がやさしく悲しみにくれる父親を包み未来への希望にいざなっています。作者は美術学校を卒業していない中国の無名画家です。

<談>鈴木(忠):9.11とは世界貿易センタービルテロ事件(2011)、その跡地の一部に記念碑・博物館があり、池の側面に犠牲者の名前が刻まれている。

⑤ 堀良慶



内田巖 (1900～1953年) 「風景」 油彩・板 P8号 制作年:不詳

この絵は関東ローム層の土の色です。富士山の噴火した火山灰は埼玉、茨城の方向に積もって関東ローム層を形成しています。雨や雪で湿った土は黒くなります。この風景画はその人物画に負けない質を持っているようで大好きな一点です。内田巖の図録の中の風景画と比較しても当作品はレベルが高い。(私の所蔵品であった女性像は福富太郎氏に乞われてお嫁に出しました)。

<談>堀:巖は内田魯庵(明治期の作家)の長男です。

⑥ 木村廣見(ゲスト)



永田力（1924～2014年）「才女気取り」 油彩・キャンバス F6号

モデルは有吉佐和子といわれる。

自由美術家協会、1962 講談社さしえ賞受賞(水上勉「飢餓海峡」の挿絵)
赤川次郎「三毛猫ホームズ」のカバー装画なども手がけた。

<談>鈴木(忠):後日、読売新聞(日曜版)の赤川コーナーに永田が「三毛猫」49作目までカバーイラストを担当したとあり。

⑦ 杉野和夫



織田廣喜（1914－2012年）「少女」 油彩・キャンバス F6号 制作年:不詳

少年時代を福岡県千手村(現・嘉麻市)で過ごした後東京、電機会社で働くなどさまざまな仕事をしながら苦学して画家となり、二科展で出会ったリラ(後に妻)さんの支えで絵筆一筋の人生を邁進、戦後間もない1950年に二科会会員、1980年に二科会常務理事、1995年には芸術院会員になるなど意欲的な創作活動を続けました。その一方で1998年にリラさんが死去するまで寝たきりの妻を愛し、ともに生き、絵を描き続けました。そうして描かれた作品は哀愁を感じさせる女性の姿や幻想的に描かれた風景が特徴です。

<談>堀:バブル期に400万円の出物があり、梅野さんに訊くと織田は流行画家で今はジェットコースターの上(山頂)の方にいると言っていた。野口:生れ故郷に嘉麻市立織田廣喜美術館が1996年に開館している。

⑧ 秋山 功



作品集

浅見哲一(あざみのりかず 1953年生)「月と家」水彩・紙 15×10.2cm 制作:2012年

浅見哲一の画を観ていると癒された気持ちになるのはなぜだろうか。安らぎと安心感を感じるのはなぜだろう。最近の浅見の作品の多くは抑制された紺青の画面に月や星や雲や山、あるいは家や木や人が単純化されて描かれている。見慣れた風景であるようでいて夢の世界にでも迷い込んだような錯覚にも襲われる。純粹で詩情豊かなこの画家の魂に触れ、心が浄化されるせいなのか。

浅見自身は山並に囲まれた埼玉県の秩父地方で生まれ、その地を離れることなく生きてきた。十代半ばから独学で油彩画を始めたというが、「芸術とは何か」を自らに問いながら、すでに半世紀近く描き続けている。自然に抱かれ、既成概念にしばられない自由な環境がこの画家を育ててきたと云えよう。

<談>鈴木(忠):「ぼくらの浅見哲一コレクション展」(2006年)に1点出品しました。

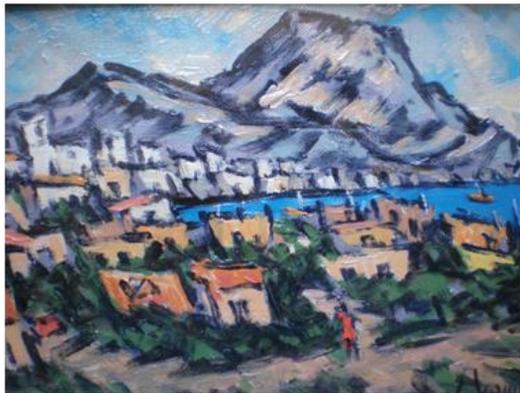
⑨ 薄井良昭



中村正義「観世音菩薩」 岩絵の具・紙 37×45cm 制作:推定1962-3年頃

すでに40年以上に渡って所有し、若き日、長きにわたり自宅内に掛け続け、愉しみ、拝みつつ、生活手段たる多忙な日々の仕事の成就を託し続けた観音像でもあります。作者は多くの重厚な素晴らしい仏像画を描いております。この作品は軽いタッチではありますが、その文字にも絵画的深みを感じております。当時この絵を目にした自宅訪問者にとっては、まずは感心されることの少なかった絵でしたが小生にとっては未だ飽きのこない祈念の一作でもあります。この作品は作者が当時の画壇の古い権威主義を嫌い日展を1961年脱退し、経済的苦境にあった時期に制作され、それほど評価も高くなく、それが故、その後間もなくして小生の手元に置くことが可能になったのではと推測しております。

⑩ 福井豊



ヴィンセンシオ・山崎（1911～1980年）「ヴェスビオとナポリ」油彩・板
16×23cm SM 制作：1970年代

2008年の第4回わの会展に画家の殆ど同じ構図のヴェスビオ山とナポリを描いた4号サイズの油彩2点を出品した。この作品は今年に入り偶然ヤフオクで見つけ入手したもの。画家作品のコレクションは油彩のみだが10点ほどになる。今東光が当時の個展案内に推薦文を寄せている。晩年を豊島区要町に居住したので数年前、現地を訪ね当時の家主より聞いたが夫人と長男もその後亡くなり遺族はいないとのことであった。画壇も無所属で類型的な作品も多いが独特の画風は池袋モンパルナス系譜の末尾に連ねてもよい異色の画家ではないだろうか。本名は山崎正雄、ヴィンセンシオは洗礼名。

⑪ 中井嘉文



前田寛治（1896～1930年）「裸婦」油彩・キャンバス 3号か
制作年：不詳（パリ帰国後と推察される。1926年頃）

前田寛治の生家は私の祖父の実家（鳥取県東伯郡北条町）とごく近い所です。私も小学生の夏休みには毎年のように鳥取県倉吉町の祖父の所に行っていましたので前田寛治の名前はよく知っていました。やっと作品に出会えた感じでした。

*寛治は帰国して数年後（パリーの豚児等）という随筆を書いているがこれは画学生仲間を指す言葉で仲間たちには里見勝蔵、中山巍、小島善太郎、中野和高、宮里勝、佐伯祐三、夫人米子、木下勝治郎、その他音楽家林竜作、川瀬トモ子、岩崎雅通などである。

<談>鈴木(忠)：木彫りの立派な額で珍しい画家の油彩画なので、皆さん前に集まり感心しながら見ていました。
中井：石神井公園ふるさと文化館分室、練馬区立美術館にコレクションを展示しています。分室ではトークもします。
「舟越展」(美術館)の招待券を持って来たので配布します。

⑫ 鈴木忠男



樋口千登世（1959年生）「おでかけ」 タブロー F0号 制作:1996年

1996年渋谷西武の個展にて10万円で購入。当時、銅版画家として銅版画作品（色刷り）は見知っていたが本画の個展とのことで見に行ったのだ。83年芸大デザイン科卒、03年「西田多希（たき）」と改名、現在は京都在住。版画も本画（マチエール）も有元利夫に似ていると当時思ったが、今回調べてみたー有元は69年デザイン科入学、85年逝去。妻容子は71年芸大日本画科卒、有元は谷中にアトリエを持ち、よく芸大に遊びに来ていたという。「有元利夫追悼集」（86年、弥生画廊発行）には諸先輩方が多く寄稿しているが「先生」と書いているのは樋口ひとりのみ。「先生に教わったすべてのことが、一時に思い出される。」とある。有元の混合技法を受け継いだのも樋口ひとりだけかもしれない。

<談>野原:この作家の大きな作品が見たい。

⑬ 佐藤裕幸



小寺健吉(1887ー1977年)「パリ郊外(仮題)」油彩・キャンバス P12号 制作:1922年

岐阜県大垣市に生れ、東京で歿。東京美術学校卒業、文展、帝展に出品し、1928年帝展で特選、その後日展、光風会に出品し、光風会名誉会員、日展参与をつとめた。

<談>佐藤:8月の佐藤コレクション展(品川区民ギャラリー)に展示(大作20点)のうちの1点、小寺の作品は4点持っています。この作品は古く黒ずんでいたのでミネラル水で2日ばかりで汚れをとりました。

太田:自分はある作品をシャワーで洗ったら絵の具まで取れてしまった失敗があります。

⑭ 野口勉



(チーク材・茶系の額縁)

惠俊彦(いさお・としひこ)「武蔵野暮色」油彩・キャンバス F8号 制作:1970年代

武蔵野の情景を一貫して描き続けている。武蔵野風景を描く画家は多いが私の心を捉え魅了させる武蔵野風景画の画家と云ったら惠俊彦しかいない。

手前に畑と荒地、後方に屋敷守といわれる防風林がそびえ一軒の農家がひっそりとうづくまり、葉を落とした櫛の大木が扇状の梢を空高く突き出している。今やこうした武蔵野の面影は西東京と埼玉西部などのごく一部に残るのみとなってしまった。現実の武蔵野風景のほとんどは消えてしまったのだ。

<談>鈴木(忠): 惠は今や大人気浮世絵版画家の国芳の研究でも著名であり、早い時期に「国芳の狂画」(1991年刊)を共編著している。野口: 惠の武蔵野風景画の額はチーク材・茶系が定番です。ゴールドやシルバーの額は合いません。武蔵野を題材にした作品が30点ほど集まったのでこれを紹介する小さな展覧会をやりたいと考えています。

文責:鈴木忠男

○ゲスト(見学)

和田 孝明さん(川越市)
幸子さん



ご夫妻で美術館巡りを楽しまれています。岩崎勝平、桂ゆき、北川民次などの作品を所蔵されています。

○ゲスト(出品と見学)

木村廣見さん(さいたま市)



92年からコレクションを始めたそうです。現在60点ほど。羽黒洞さんからの紹介でお見えになりました。

○出席会員(見学)

野原宏(理事長)



的確な助言、品評をいただきました。

○放談会終了後、希望者10名で懇親会を実施しました。

○次回放談会は平成27年10月に実施予定です。

発行 : NPO法人あーと・わの会 通称「わの会」

発行日 : 平成27年8月吉日

編集 : 実行委員

佐藤裕幸(司会進行) 鈴木忠男(書記) 野口勉(写真・編集制作)

連絡先 : 事務局 〒277-0871 柏市若柴1-358 堀良慶

TEL 04-7134-8293 ryokeihori@yahoo.co.jp

発行部数 : 75部